

水稻「おいでまい」の栽培基準の策定

1. 背景・ねらい

温暖化によって水稻の登熟期が高温となり、高温障害が発生して県産米の1等米比率が低迷しています。この対策として、農業試験場において高温登熟性に優れる「おいでまい」を育成し、平成22年に奨励品種に採用したところです。今後「おいでまい」の1等米を確保し、良食味を目指した米づくりを進めていくためには、適切な栽培管理を行っていく必要があります。そこで、平成25年からの「おいでまい」の一般栽培の開始にあわせ、生産農家への栽培指導を行うための指針となる栽培基準を策定することとしました。

2. 成果の概要と特徴

平成22～24年にかけて農業試験場で実施した試験結果および平成23、24年に普及センターで行った実証ほで得られた試験結果に基づき、「おいでまい」の栽培基準を策定しました（表1）。基準の設定に当たって検討した主な内容は以下のとおりです。

1) 田植え適期マップ

1 km四方のメッシュに分け、各地点におけるメッシュ平年値から出穂後30日間の平均気温が22.5℃（登熟適温）となる出穂期を設定しました。そして、その出穂期となる田植え時期を推定（DVRによる生育予測）して田植え適期マップを作成しました（図1）。

2) 施肥基準

各種施肥法について検討した結果、速効性肥料では基肥5kg（10a当り窒素分量、以下同様）+穂肥Ⅰ（出穂18日前）2.5kg+穂肥Ⅱ（出穂10日前）1.5kgが収量、外観品質、食味ともに良好となることが明らかとなった。これに基づき、ツーショット肥料では基肥4.5kg+穂肥3.5kg、ワンショット肥料では7.5kgを基準量として設定しました。なお、ワンショット肥料は温暖化による高温で緩効性肥料の肥効が早まり過ぎるので、窒素の溶出を抑えた「温暖化対応基肥一発肥料」を採用しました。

3) 病虫害防除体系

葉いもちと紋枯病の防除に主眼を置き、数種の育苗箱処理剤について検討した結果、ビルダープリンスグレータム粒剤の効果が高いことがわかりました。

4) 各ステージの生育指標

生育調査の結果を解析することにより、1等米が得られ、良食味となる「おいでまい」の標準生育として最高分けつ期および穂肥施用時の草丈、葉色、出穂期および成熟期の葉色を設定しました。

以上の結果を基に、平成25年度「おいでまい」栽培マニュアル（図2）および「おいでまい」栽培のしおり（図3）としてまとめました。

3. 成果の活用面・留意点

1) 平成25年度「おいでまい」栽培マニュアルおよび「おいでまい」栽培のしおりは、「おいでまい」の栽培に取り組む農家に配布し、普及センターおよびJAより栽培指導を行います。

2) 試験年数がまだ少ないので、今後データ蓄積を図りながら修正を行っていく予定です。

